

# 日本人の社会性の発達を支える 学校教育の可能性について

川崎徳子・小杉考司・小野史典・大石英史・遠藤野ゆり\*・大塚 類\*\*

Concerning the potential for formal education to support the development  
of social skills in Japanese young people

KAWASAKI Tokuko, KOSUGI Koji, ONO Fuminori, OISHI Eiji,  
ENDO Noyuri, OTSUKA Rui

(Received September 29, 2017)

## 目 的

社会性の発達、集団社会において必要とされる資質・能力として、教育の課題の一つであり、その育成には、家庭を基盤とする生育環境や学校教育における体験など、教育的環境に支えられるところが大きいと考えられる。現在の日本の学校教育及び、社会生活での道徳的な問題に対する対応として、文部科学省のもと道徳教育の在り方の重要性の検討がなされ、2015（平成27）年3月の学校教育法施行規則及び、小学校・中学校の学習指導要領の一部改正、そして、従来の「道徳の時間」が「特別の教科 道徳」として教科に位置づけられた。また、新しい学習指導要領の方向性も含め、教科としての道徳の授業展開においては、「考え、議論する道徳」が示されたように、授業方法も含めた道徳教育のあり方が問われてきている。一方、道徳性のような価値観を有するものをどのように評価するのかという道徳の教科化にともなった評価に対する課題もある。

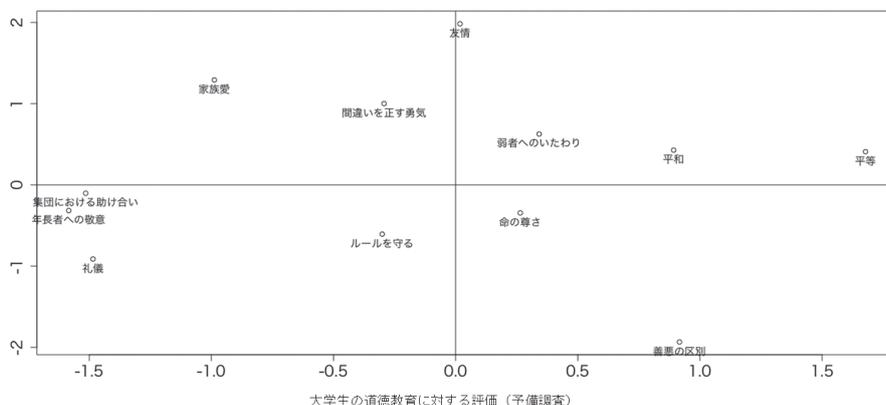
そこで、本研究では、社会性の基盤となる価値・判断などの教育の可能性を考えるために、これまでの学校教

育でどのような道徳心が育成されているかについて検討する。現在、在学中の大学生について、質問紙による回想法での調査から、これまでの学校教育において道徳の授業で培われたものは何であるか、あるいは、現在の自分にどのように影響しているかなど、学生の経験的実感による評価を得る。その結果を踏まえて、道徳の授業は本当に道徳の涵養に役だっているのかという実質的な成果の検討も含み込みながら道徳教育の現状を眺め、文部科学省が定める道徳教育の方針との対応について考察していく。

## 予備調査

### 目的

これまでの学校教育において道徳の授業で培われたものは何であるかについて、学生自身による回想法で回答を求めた。さらに小中の学習指導要領の道徳編（文部科学省、平成20年告示）から抽出した内容項目との対応についての反応も含め、本調査での調査項目を作成する。



\* 法政大学 \*\* 青山学院大学

**方法（調査時期と調査対象者）**

2016年6月初旬、Y大学1年生88名への質問紙による集合調査を実施。

**予備調査の結果と考察**

予備調査の段階では、道徳の内容項目である平等、公平、命の尊さなどの11のカテゴリに対してどの程度該当するかの評価を求め、対応分析で分析したところ二次元で30%の説明が可能であることが示された。この結果に基づき変数を分類するために、二次元座標に変数間の距離行列を作成し階層的クラスター分析（ward法）を行ったところ、平等・公平、命の尊さや弱者へのいたわり、年長者への敬意と集団内での互助、家族愛と友愛、の四つのクラスターが得られた。

本結果からこれまで受けた道徳教育の学習内容には、学生自身が実感しているものにある程度の属性があることが示唆されたと捉え、質問項目の検討も含めた本調査の質問紙の作成に進んだ。

**本調査**

**方法**

**調査時期と調査対象者**

2016年6月と2017年6月に、Y大学の学生を対象に質問紙による集合調査を実施。

398名の学生（1年生280名、2年生4名、3年生104名、4年生5名、不明5名。男女比は、男性164名、女

性143名、無回答91名）から有効な調査の回答が得られた。

**質問紙の構成と調査項目**

質問紙は、予備調査で検討した質問項目と同じく道徳の授業に対する学習の成果及び内容について回想法での質問とした。具体的には、道徳の授業に対するイメージについて（9項目を4段階で評価）、道徳の授業でどんなことを学んだか（項目選択、及び、自由記述）を回答してもらった。さらに、現在の生活との関連についての検討も行うこととし、主観的幸福感度について（15項目を4段階で評価）の回答も得ることとした。

道徳の授業に対するイメージについては、「道徳の授業は楽しかった」「道徳の授業はためになった」「道徳の授業は自分の言動に影響を与えた」など、道徳教育に対するイメージ評価を含む独自の9項目を用い、4件法（4点：とてもそう思う～1点：全くそう思わない）での回答を求めた。道徳の授業でどんなことを学んだかについては、予備調査を同じく学習指導要領から抽出した「平等」「命の尊さ」「友情」などの12の内容項目からの項目選択、及び、自由記述での回答を求めた。

主観的幸福感度は、伊藤裕子・相良純子・池田政子・川浦康至（2003）の主観的幸福感尺度15項目を用いた。例えば、「あなたは人生が面白いと思いますか」といった項目に、4件法（4点：非常にそう思う～1点：全くそう思わない）での回答を得ることとした。

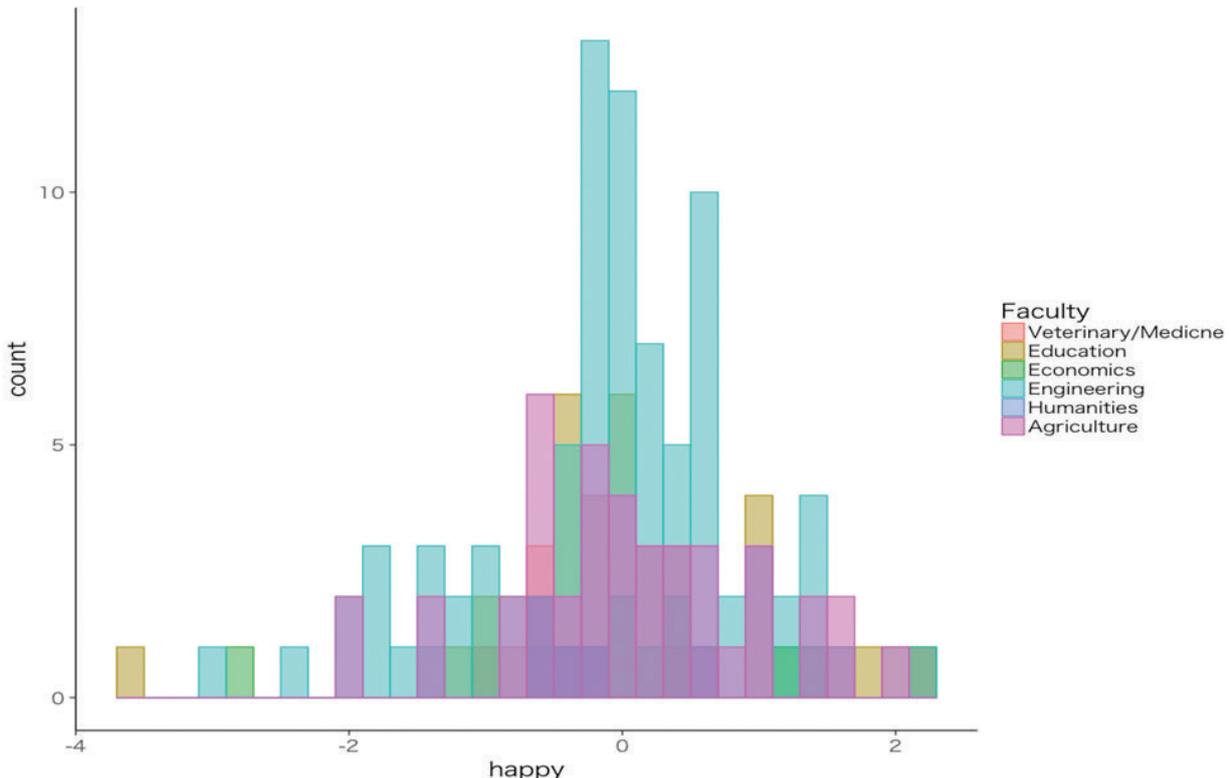
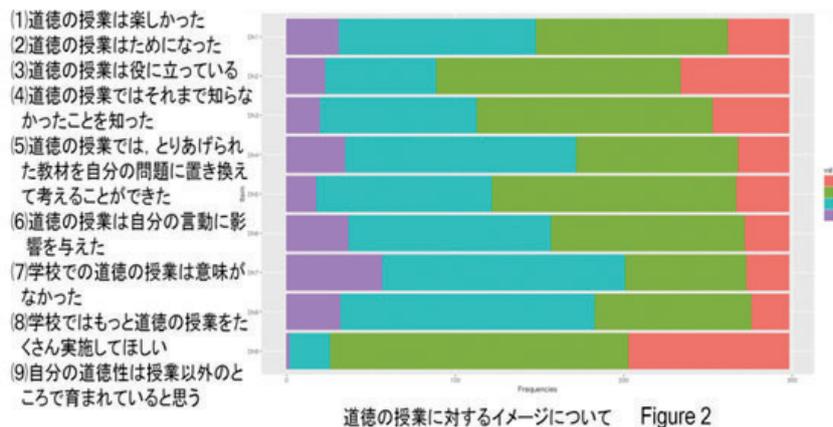


Figure 1 道徳の授業に対する評価



### 結果と考察

1、「道徳の授業に対するイメージについて」（9項目）については、相関分析、及び、回帰分析を行った。

①9つの項目を合算した合計得点【Figure 1】に示す。図からスコアの分布は正規分布に従っていると考えられる。

次に、②項目別に見ると【Figure 2】、(1)「道徳の授業は楽しかった」から(8)「学校ではもっと道徳の授業をたくさんしてほしい」までの項目については、ばらつきはあるものの、印象としては(9)「道徳性は授業以外のところで育まれていると思う」の評価が特に高いことから、大学生の多くは、道徳の授業をある程度評価はしていること、道徳性そのものは授業以外から育まれると認識していることが示された。

2、「道徳の授業に対するイメージ」（9項目）と主観的幸福感尺度15項目について、回帰分析を行った。9項目の合計得点を独立変数、幸福度を従属変数とした回帰分析の結果、回帰係数は0.54（自由度調整済み $R^2=0.10$ ）で道徳の授業の評価が高い人は、幸福度も高いことが示された。【Figure 3】は回答者の所属学部別に回帰線ひいたものを示している。

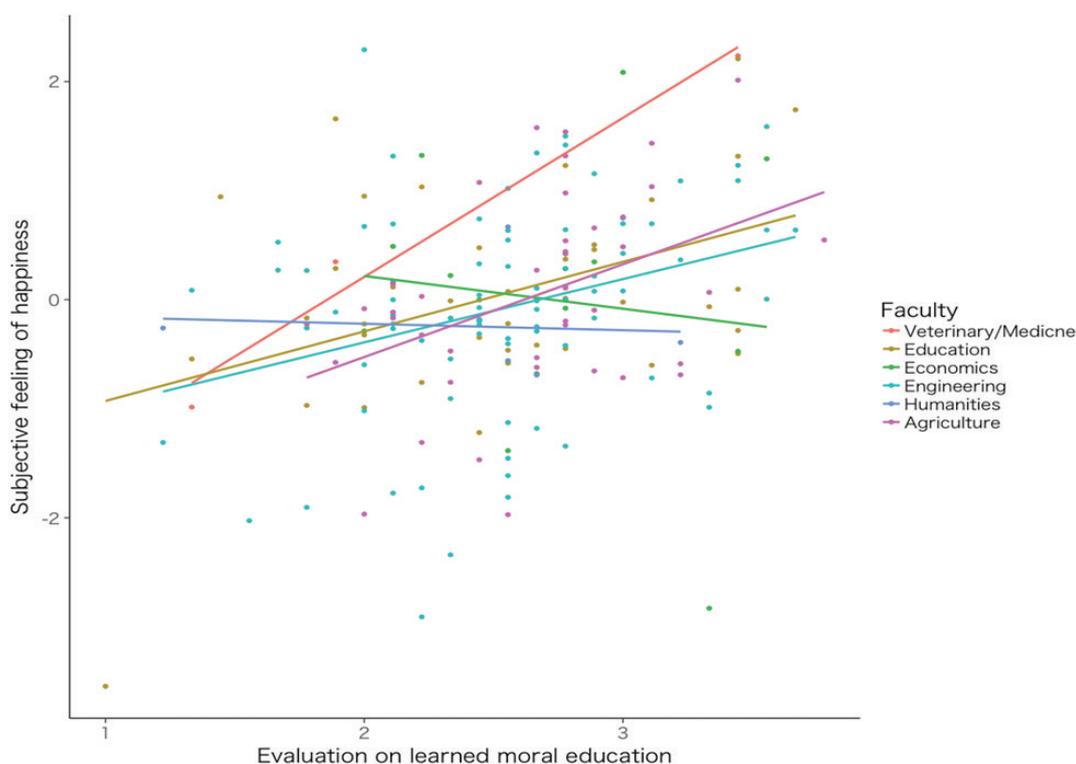
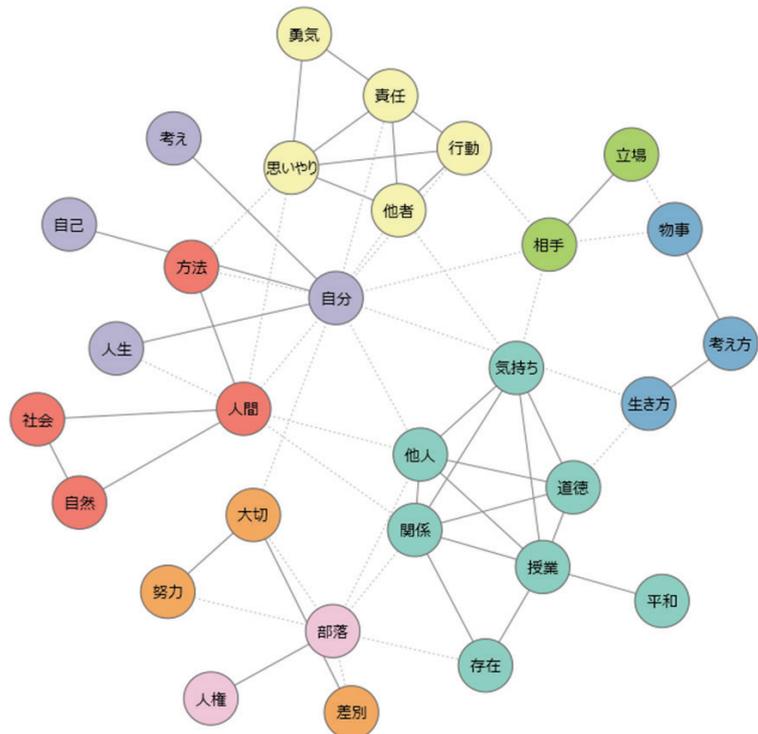
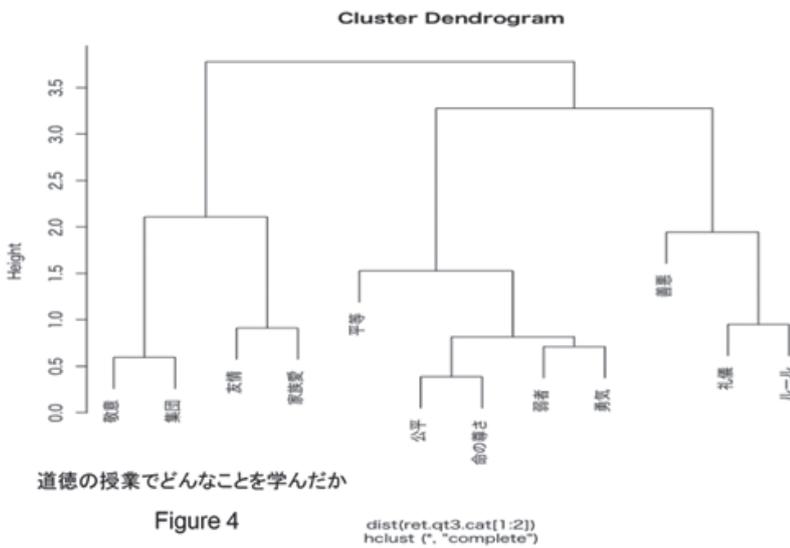


Figure3 幸福度と道徳の授業のイメージとの関連について

3、「道徳の授業でどんなことを学んだか。」(項目選択)については、予備研究と同じく対応分析を行い、第二次元までの座標を基に項目ごとの距離行列を算出し、クラスター分析を行った。変数の分類結果としては、道徳の授業で学んだと思われるものとして、「敬愛と集団」/「友情と家族愛」、「平等」/「公平と命の尊さ」・「弱者へのいたわりとあやまちを正す勇気」、「善悪」/「礼儀とルール」3つのグループに分類された。【Figure 4】

4、「道徳の授業でどんなことを学んだか。」の自由記述に対しては、テキストマイニングで分析した。形態素解析をした結果のうち、頻出度数3以上の名詞、サ行変格活用名詞、形容詞について、共頻行列を作成して要素同士の関係の強さを分析した。なおこの分析にはKHCoderを用いている。

【Figure 5】にはネットワークグラフで表示したキーワードを示している。ここから、「人間関係や人生に関連するもの」「他者との間の自分の行動と責任に関連するもの」「個人の物事や生き方」等が連関している学習内容として自覚されており、加えて、「人権」「部落差別」等も共頻関係の中に表れていることが伺える。



## 総合考察

本研究では、これまでの学校教育でどのような道徳心が育成されているかについて、在学中の大学生への質問紙による回想法によって検討した。調査の結果、日本の学校教育における道徳教育について、大学生の印象評価では、授業で学んだと思われるものが、「敬愛と集団」/「友情と家族愛」、「平等」/「公平と命の尊さ」・「弱者へのいたわりとあやまちを正す勇氣」、「善悪」/「礼儀とルール」の3つのグループの内容に示された。つまり、大学生にはこのような道徳的価値感が自覚されており、この学びが、社会性の基礎となる価値・判断につながっていると考えられる。また、大学生の多くは、道徳の授業をある程度評価していることも受け取れた。同時に、道徳性そのものについては、授業以外から育まると認識していることも明らかになった。この結果は、大学生が実際の道徳性が育まれていると感じているのは、道徳の授業とは限らないという評価であり、これはまた、実生活における実践的な面での経験が重要だと考えていることも含んでいることが伺える。

前述したように、今後、道徳の教科化にともない、児童・生徒の評価を行う必要性が出てくるが、これらの結果から、これまでの道徳の授業において得られる学びは少なくとも3つのまとまりとして意識されている可能性があることと、その評価については実践場面への見通しも含めた柔軟な対応が求められるということが捉えられるのではないだろうか。

一方、道徳教育に対する評価の高い人は、幸福度も高いという評価から、道徳の学びは、社会生活を営む上での必要な学びとして、その効果が期待されるものであることが示された。しかし、この結果は、逆の位置から眺めると、道徳教育の充実のための方策の検討を問われているとも言える。これらの結果には、現代社会における道徳教育の今後のあり方を考える上での課題が現れているのではないだろうか。こうした課題を踏まえた上で、今後の道徳教育の在り方については、新しい学習指導要領でも求められるアクティブラーニングとの関連や、道徳教育も踏まえたカリキュラムマネジメント等にもつなげて考えていきたい。

その他、自由記述の中には「平和」「部落差別」等も学んだことの内容として上がっており、日本固有の道徳の授業のあり方も見えてきた。このような日本固有の内容から考える道徳教育のあり方についても、学びと実践とのつながりの課題を踏まえ、また、世界的な視野への広がりも含めて、さらなる検討の必要性が明らかになったのではないだろうか。

## 引用・参考文献

- ・中央教育審議会答申「道徳に係る教育課程の改善等について」2014（平成26）年10月
- ・中央教育審議会答申「幼稚園、小学校、中学校、高等学校、及び特別支援学校における学習指導要領等の改善及び必要な方策等について」2016（平成28）年12月
- ・道徳教育に係る評価等の在り方に関する専門家会議「特別の教科 道徳」の指導方法、評価等について2016（平成28）7月
- ・文部科学省「幼稚園教育要領解説」2008（平成20）
- ・文部科学省「小学校学習指導要領解説」道徳編2008（平成20）東洋館出版社
- ・文部科学省「中学校学習指導要領解説」道徳編2008（平成20）日本文教出版
- ・文部科学省「小学校学習指導要領」2015（平成27）年7月
- ・文部科学省「中学校学習指導要領」2015（平成27）年7月
- ・石井留美（1997）主観的幸福感研究の動向コミュニティ心理学研究, 1, 94-107.
- ・伊藤裕子・相良純子・池田政子・川浦康至（2003）主観的幸福感尺度の作成と信頼性・妥当性の検討, 心理学研究, 74（3）, 276-281.
- ・豊田秀樹（2016）はじめての統計データ分析, 朝倉書店.

## 付記

本研究は、科学研究費補助金基盤研究（C）（課題番号15K01756）の助成を受けて行っている。また、本稿は、2017AASP（Asian Association of Social Psychology）で発表した内容を、修正・加筆したものである。